



第121号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21

# 昭和五十九年度総会次第報告

会長 中野 敬次郎

昭和六十年四月十三日、市営郷土文化館会議室で五十九年度総会を次の順序で開催しました。

1、小田原史談会四月定例会事。

2、総会(午後一時)総会式次第

司会者、相沢副会長  
開会のことば、杉崎副会長  
会長挨拶、中野会長  
議長選出、富田理事  
議事

イ 五十九年度事業報告  
下川理事

ハ 五十九年度決算報告  
相沢副会長  
富田理事

ニ 六十年年度予算案提出  
相沢副会長  
中野会長

ホ 六十年年度事業計画案  
中野会長  
平岡副会長

小田原史談会59年度収支決算書及び60年度予算(案)

| 昭和59年度決算                    | 昭和60年度予算                    |
|-----------------------------|-----------------------------|
| (収入の部)                      | (収入の部)                      |
| 繰越金 362.943円                | 繰越金 332.171円                |
| 会費 1.065.000<br>(2.500×426) | 会費 1.000.000<br>(2.500×400) |
| 補助金 24.000                  | 補助金 24.000                  |
| 預金利子 6.573                  | 預金利子 5.000                  |
| 雑収入 56.500                  | 雑収入 5.000                   |
| 計 1.515.016                 | 計 1.466.171                 |
| (支出の部)                      | (支出の部)                      |
| 通信費 284.250                 | 通信費 300.000                 |
| 会報印刷費 280.000               | 会報印刷費 300.000               |
| 講師謝礼 60.000                 | 講師謝礼 90.000                 |
| 交際費 47.000                  | 交際費 50.000                  |
| 事務用品費 38.972                | 事務用品費 30.000                |
| 編集手当 40.000                 | 編集手当 40.000                 |
| 事務手当 360.000                | 事務手当 360.000                |
| 会議費 63.823                  | 会議費 80.000                  |
| 雑費 8.800                    | 30周年記念事業準備費 150.000         |
| 計 1.182.845                 | 雑費 10.000                   |
| 残金 332.171円                 | 予備費 56.171                  |
|                             | 計 1.466.171円                |

### 特別会計(史跡めぐり収支報告書)

S59.6.19~20 伊豆方面 39名参加 8.19 千葉方面 63名参加 11.1~2 木曾路 49名参加 S60.1.27 明治神宮他 38名参加 3.24 橘地区 30名参加

前年度よりの繰越金 445.659円  
一般会計へ 100.000円繰り入れます

今年度収支合計  
収入 2,245,470円 - 支出 2,354,235円 = 残△108,765円  
前年度繰越金 445,659円 + 本年度残金△108,765円 = 336,894円は次年度へ繰越します。 以上報告致します。

3 講演会午後二時  
講師 会長中野先生  
演題 千利休と山上宗二  
秀吉、北条との関係に付いて

理事会関係行事報告  
五月十九日、理事  
松永記念館 井上綱三先

八月十一日 理事会  
葉国府台史跡めぐりに付いて、信州木曾路史跡めぐり舟下り中止の件  
九月理事会休会  
九月二十六日 久野古墳  
祭理事と事務局出席  
十月十三日 理事会 信州木曾路史跡めぐりに付いて

三月十六日 理事会  
地区史跡めぐりの件  
60年

東海道五十三次を東京日本橋から京都三条大橋まで何会かにかけて廻りたい。  
筑波万博及小田城葉王院等の見学をしたい。  
初詣は相模五社廻りかどうか、実施に付いてお理事で決定致します。 以上

生遺作展について  
五月二十七日 曾我城前寺の傘焼 理事数名出席  
六月九日 理事会 小田原市文化団体連盟発行OCに付いて 小田原史談会  
発足30周年につき記念行事  
事予定案について  
七月十四日理事会 千葉国府台方面史跡めぐりに付いて  
八月十一日 理事会 千葉国府台史跡めぐりに付いて、信州木曾路史跡めぐり舟下り中止の件  
九月理事会休会  
九月二十六日 久野古墳  
祭理事と事務局出席  
十月十三日 理事会 信州木曾路史跡めぐりに付いて

講演会 田代道弥先生「益田鈍翁と箱根路」  
十一月理事会休会  
十二月八日 理事会  
一 月東京方面初詣の件について  
新年会の件について  
六十年一月十八日 菊木別館にて新年会開催  
二月九日 理事会 小田原文化団体連盟の他市の文化推進状況視察参加について。山口郷土資料館長退任の件、三月橘地区史跡めぐり竹見先生誘導の件  
二月十五日 佐倉仁重理等の葬儀、会長以下四名参列  
三月十六日 理事会 橘地区史跡めぐりの件  
60年

度総会の件  
四月二日 会計監査  
六十年年度事業計画案  
一、会報 一、二、三、四回出した、此の内一回記念号を出したい、特別号として小田原新旧地名地図を会報の一回分として、三十周年記念事業として史跡廻り案内集を冊紙にしたい。  
二、講演 年三回  
三、史跡廻り

北村透谷家譜の研究 (5)

中野 敬次郎

(ハ) 維新以後の両北村家

明治維新前後のこと、つまり透谷の父快蔵のこと、透谷の若き一代のこと、それらはすでに多くの人によって多く語られてきたことであるから、こゝでは一切省略する。

要するに維新以後は北村家は医業とは関係がなくなつたが、参考のために両北村家の明治維新以後の経過について述べておこう。

先づ前川町屋の本家では前述したように玄快が小田原藩の招きに応じて小田原城下の唐人町に移つたので北村家は二家に分れたから本家の方は玄快の妹(実は二代玄快の末娘)のすみに同じ前川村の岩越平八の五男源兵衛を迎えて家督をたてさせたが、この初代源兵衛は文久三年(一八六三)に歿したが、彼は享和元年の誕生であるから卒年は六十二才であった。

妻のすみは明治十八年(一八八二)に歿したが、長命であつたようだが歿年が不明である。

たる墓石があつて

○高岳院祥林恵静上座

○瑞岩院一峯恵心大姉

高。文久三亥年五月十五日

五日

前川村岩越平八五

男源兵衛行年六十

一才

瑞。明治十八酉年二月

四日

北村玄快娘すみ女

とある。

二代源兵衛(涌泉院禪雄

衛機居士。大正五年十二月

三十日歿)は初代源兵衛の

子で妻イチ(福取院貞操

妙寿大姉。大正七年二月十

二日歿)との間に玉太郎を

生んだ玉太郎は妻イマとの

間に当主竜一郎氏を生んだ

当主竜一郎氏は妻ミサ子

との間に幸子、きさ子、一

郎の三人の子女子があつて

前川町屋の旧家として知ら

れ農家として現在大いに栄

えている。

たが、この先妻かについて前記しておいたように出身、歿年、年齢、墓石など一切不明であつて、恐らく離縁して去つたのであろうと推定するがそれも確証があるわけではない。

さて玄快の三子は快蔵が家を継ぎ、さとは小島家に嫁し、さくは金子家に嫁した。

北村快蔵(透谷の父)は父玄快隠居のあとを受けて藩医の職についたが、まもなく明治四年の廃藩置県にあつて食禄を離れることになつたので、この年医業を廃した。その後の彼の苦難と波乱に満ちた生涯は、明治維新の激動の中に食禄を失つた一般地方下級武家の歩んだ道の一縮図ともいふべきもので、語るべきことが多いが、ここでは一切を省略する。

明治元年快蔵二十七才、妻雪子二十一才の年の冬十一月十六日(旧曆十二月二十九日)、長男門太郎、後の作家透谷が誕生し、五年を経て、次男垣穂(明治六年五月三十日生)が生れたのであつた。

(イ) 透谷と父母兄弟妻子

透谷の母雪子の素生をしらべると、小田原藩医に小野東温(高二百石)という名医家があり、その娘にまさがある。まさの弟良哲が

吉浜村(湯河原町古浜)の在家医師富田家の養子となつて、富田良哲と名乗つてなかなかのすぐれた医者だつた。

まさは小田原藩士大河内羽左エ門(唐人町、高二百石)に嫁して、さく、はるゆき、なみ、きんの五女を生み、三女ゆき(雪子)が北村快蔵の妻となつて透谷を生んだのであるから、透谷出生の周辺はみな医師関係であつた。

快蔵夫妻、透谷夫妻の墓は、小田原市谷津の高長寺にある北村家墓地に玄快夫妻のものと同並んで建つてい

る。

快蔵夫妻のは、

○快源院禪心恵山居士

○智章院禪室慈照大姉

○。明治三十七年十月二十三日俗名快蔵

智。大正四年八月二十四日俗名ゆき

孫英子建之

明治三十八年十月七日幸

とある。快蔵六十五才、ゆき六十八才であつた。

○透谷北村門太郎墓

明治二十七年五月十六日死

透谷夫妻の墓石は東京都港区白金台町一丁目四十一番地(透谷は芝公園内の自宅で縊死した)の瑞聖寺に葬られ、前掲の墓石も同寺にあつたのである。

透谷歿後六十年祭が近づいた頃、透谷の遺児英(ふさ)さんが私のところへ来られて、透谷夫妻の墓を小田原にどうしても移したい

と思うから尽力してほしいと言ふことであつたので、

昭和二十九五月十六日小田原市において北村透谷六十年祭を行い、事業として①透谷碑(島崎藤村筆文)を八幡山大久保神社裏から小田原城内二の丸(現在地)に移すこと。②透谷夫妻の墓を遺骨、墓石ともに小田原市谷津の高長寺(現在地に)に移すこと。③透谷誕生地の小田原市唐人町の旧宅跡に記念碑を建立すること

④透谷の全遺品を堀越英氏より小田原市に寄贈して郷土文化館に保管して一般公開すること(現在遺品は天守閣に保管公開している)の四項目を契約してそれを

実施したのである。

それ故、透谷夫妻の墓碑はそのとき東京白金台町の瑞聖寺から持って来たものである。

透谷の死んだときの遺体はそのまゝ土葬されたので小田原に移すとき墓地を掘

つたら遺骨だけはそのまま残つていたので、全部壺に収めて小田原に持って来たが、その時立ち合った三人のうち、瑞聖寺の住職も、透谷遺児の英(ふさ)さんも既にとうに世を去つてしまつて、透谷の生の遺骨を

実際に見た者は私だけになつてしまつた。

そこで高長寺では墓石移転を機に夫妻に院号を諡することにした。透谷のは

○透谷院無門章賢居士

とし、夫人美那子のは

○透閑院章室貞観大姉

といふのである。前川の長泉寺は透谷夫妻が、一時偶居したところであり、北村一家の祖先の菩提寺でもあるから、早くから透谷に対して院号が諡られていて「謙行院一透玄谷居士」と付けられていたから、元来キリスト教徒である透谷に仏門の院号が二つも諡されているのは奇異な感じがせぬでもない。

透谷の弟垣穂は前記したように親籍の丸山家に養子に入つて同家を継いだが、医師とはならず墨絵画家になつた。高長寺や長泉寺の襖絵に作品を残している。

昭和二年八月十九日に五十五才であまりぐまれない生涯を終つた。「耕月院古香清蕙居士」と諡名された(高長寺)。彼の画号は古香

と言ったのである。さて透谷の直系については妻の美那子(石坂昌孝長女)英(ふさ)という女子一人か生まなかつた。この英(ふさ)が堀越万三郎氏に嫁したため、北村姓はこれで絶えてしまったのである。

透谷の友人で同志であった島崎藤村が書いた自伝小説の「春」には、藤村が前川の長泉寺に偶居中の透谷一家を訪れるところの記事がある。

その他に随所に透谷のことが出てくるが、この小説では透谷を友人「青木」という名でかき、透谷夫人美那子を「操」、娘の英「ふさ」を「鶴子」と書いている。

さて、最後に前川町屋にある本家北村家のことを書くが、五代玄快が藩医となつて分家して小田原城下の唐人町に移ってしまったので、本家は農業專業になつて栄えていることは前記した。

唐人町の北村家は五代玄快が世を去つて後は一家が東京に移つたため(水戸にもしばらく住んだ)、小田原の家は明治の末さとの婚家である隣接の小島材木店で管理され、家屋もその後失われたので唐人町遺跡、遺品は何もない。

前にも述べたように透谷の遺品は透谷遺児の英(ふさ)さんの手元に相当残つていたので同人の好意で(英さんはすでに歿した)当時全部を小田原に寄贈して頂いたので、私が直接受けとつて、現在小田原城天守閣に収めてあることは前述の通りだ。

なを後世の人々のために記しておくが、何回も言うようだが、高長寺の透谷墓は昭和二十九年まで東京の芝白金台町の瑞聖寺にあつたものを同年小田原の現地に移したものだし、小田原二の丸にある有名な「北村透谷碑」も同年に八幡山の大久保神社裏土手にあつたものを移したのだし、また旧唐人町跡に建てられている「北村透谷誕生の地」の碑も同年建てたものであるが、この碑の位置が建設當時より変動したことなど、いろいろ語るべきことがあるが、ここでは一切省略するから詳しいこと私の書いた「小田原明治百年文化史」を見ていただきたい。

さて、前川町屋の北村家に残っている医術関係遺品については、同地の研究家内田勝彦氏が詳細に調査されたものがあるので、それをかりて医学、薬学にたづさわる人の参考にした。一、薬用徳利 四本

一、薬用計り 三本  
一、薬ダンス 三竿  
一、薬研 三個  
一、薬箱 一個

その他であるが、特に薬箱は総漆塗五代重ねの立派なもので、その中には一わく毎に全部に薬包(薬品は入っていない)が入っていてそれは次のような薬名が記してある。

一段目  
薬調合箱(薬を調合した名残が見受けられる。)

二段目  
巧矩、聖空(貝母)、工舒、工篋、巧炮、巧早、工順、工吞、神周、神只、神芸、神全、神蔭、神山、神童、神獲、神文、神重、神屏、神紅、工蠶、巧莪、聖非、神穉、工芥、聖姑、聖芯

以上二十八薬包  
三段目  
工金、巧介、巧刺、聖伎、工策、巧己、工曲、聖支、聖牙、聖沢、聖慈、工懐(小苗)、聖滑(滑石) 聖家、聖老、聖栢、聖南(天南)、聖生地、聖將、聖菓、巧益、工釣、聖淋(木瓜)、聖好、巧三、聖蚯

以上二十七薬包  
四段目  
神麵、巧湘、工蛭、工詞、巧尿(寄生)、工水、聖小、神菊、巧杏、工菊

菊花)、神長、工花、工対、巧酒、神芳(血止) 神婆、神任、神其、神癖、神白、工麦、神生、巧凍、巧鬼、神妙、巧枝、工吏、巧及、神鮫

以上二十九薬包  
五段目  
巧粉(天粉)、工葛(葛根)、巧草、聖姜、聖鮮、工麻(仁外麻)、工玄、聖索、聖異、聖根、聖頻

工欄、工定(天一)工欄(牡仲)、工力、神相、聖煤、巧遠、巧蘭、巧王、巧葉、工没、工向、神田、聖恙、工昌、工蕨、巧? 以上二十八薬包、合計百十二薬包が残されている。私は医学専門家でないので、この薬名や効能について知らない、詳しく知ることが出来たら面白いと思う。(終)

# 信州木曾路の旅

## 下川茂三郎

の溪谷との稜線は、今も昔も変らない歩みを物語っている。島崎藤村の略年譜 詩人・小説家で本名春樹 明治五年(一八七二)三月二十五日筑摩県馬籠村(長野県木曾郡山口村馬籠)に生れ、父は明治維新まで馬籠宿の庄屋、本陣問屋を兼ねていた。

十才(明治十四年)の春修学のため上京、泰明小学校・三田英語学校・同二十四年明治学院卒業、在学中にキリストの洗礼を受け、二十六年北村透谷を中心とした「文学界」の創刊に参画した。

明治女学校・東北学院・小諸義塾の教師など歴任、明治三十年八月に初の詩集「若葉集」を刊行し、この頃から藤村の名が日本近代文学史に連ねられ、一葉集・夏草・落梅集の詩集を次々に発表し、信州小諸塾教師赴任中に秦慶治の三女冬子と結婚した。

のち散文に転じ三十九年「破戒」を発表小説家として春・家・新生・梅の実の熟するときなど次々に刊行し昭和に入って大作「夜明の前」を発売し文豪藤村と呼ばれるに至つた。

晩年大磯を愛し移り住み「東方の門」執筆中の昭和十八年八月二十二日脳溢血

で逝去。遺骸は大磯町の地  
福寺境内の門を入ったすぐ  
左手に埋葬され、谷口吉郎  
博士設計で有島生馬氏の筆  
「島崎藤村墓」とある。寺  
は承知四年(八三七)の草  
創の古寺で早咲きの梅で知  
られている。

遺髪と爪は馬籠の永昌寺  
に埋葬し、戒名「丈樹院静  
屋藤村居士」。

藤村記念館案内

◎隠居所Ⅱ旧本陣で唯一の  
明治以前の建物で藤村が此  
処で四書五経などの教えを  
受けた所、階下物置には藤  
村童話「ふるさと」の民具  
類が展示されている。

◎第一文庫Ⅱ旧大黒屋の土  
蔵二棟内を松材で改装して  
図書室として利用。

◎第二文庫Ⅱ一九七一年完  
了、「夜明け前」の原稿・  
「大黒屋日記」父正樹筆  
2、自書全集・基礎研究書  
3、詩書が四五〇余冊。

4、藤村童話さし絵・鶏二  
氏・夢二氏の原画・藤村  
の意中の人佐藤輔子明治女  
学校卒業式答辞草稿。

5、藤村デスマスク・次男  
鶏二画・長男楠雄氏プロ  
ンズ像・三男翁助氏の油  
絵。

6、アルバムコーナー。  
◎第三文庫Ⅱ一九八三年完  
了、明治女学校・仙台東北  
学院・小諸教師時代・女学  
雑誌・佐藤輔子日誌・文学

界・藤村誌集・木村能二書  
2、散文の習作時代より創  
作時代・緑蔭叢書・破戒・  
春・家など代表作書。  
3、渡欧時代の資料。  
4、藤村肖像・原稿書類。  
5、晩年の大磯書齋を移築  
復元しあり。

記念館見学を経て引返す  
下り石畳道に添う小川利用  
の水車を玄関脇にした馬籠  
茶屋の前に清水屋(原家)  
は島崎家と共に、馬籠宿役  
人として代々親しく、特に  
原一平は藤村との親文も深  
く、大正十一年八月には藤  
村の長男楠雄を東京の明治  
学院を中退させて、ふる里  
馬籠に帰農させて清水屋に  
託した。幼なくて遊学の旅  
に出た藤村はふる里が忘れ  
られず「晩年の嵐」に森さ  
んとして原一平の事が記さ  
れている。

清水屋(原)資料館  
祖先に信濃国伊那郡高遠  
藩の藩士で、享保十九年(一  
七三四)故あって木曾馬  
籠に移り永住す。初代原弥  
惣より代々よく勤勉努力し  
五代目平兵衛は組頭・六代  
平兵衛は若年にして宿役人  
を勤め、明治維新後は副戸  
長、戸長を・七代松太郎は  
村議、郡会議員として活躍  
八代原一平は三十才で村長  
を務める家柄であった。

宿場独特住居の一・二階  
を資料室に解放し、六代平

兵衛が集めた馬籠文化・生  
活史を知る貴重な資料が所  
せましと展示され、特に江  
戸時代の代表作の尾形光  
琳・土佐光則・富岡鉄斎・  
狩野養信等の掛軸と陣笠・  
陣羽織・打掛け・袴・什器  
や陶器など数多く陳列され  
街道歴史が深く刻まれた、  
旧家の貴重品を見学す。

午後一時四十分乗車し国  
道十九号を木曾川添いに走  
り、中部電力発電所山口ダ  
ムの満水に写る赤い鉄橋や  
溪流に点在する白色の大石  
が、恵まれた清朗の山野と  
紅葉のコントラストは、私達  
の心を和ませながらやがて  
妻籠宿に到着。

旧中仙道妻籠宿  
宿場は木曾川対岸の二百  
米位の山腹にあり、バスは  
入らず河川敷駐車場に下車  
し、段々田圃の畦道を登る  
「先らない・貸さない・壊  
さない」の妻籠憲章を忠実  
な、街道宿場保存に驚嘆し  
ながら脇本陣手前にて、道  
中笠かざして記念撮写。

奥谷郷土館(脇本陣)  
城郭門と城壁で囲む壮大  
城郭風木造二階建、待玄関  
を入り囲炉裏の廻りに輪に  
なり暖をとるながら、屋号  
「奥谷」姓は林・二十六代  
目主人より当家に伝わる史  
歴の説明と案内を聞く。

町が南木曾町の貴重な文  
化遺跡として林家より借受

け郷土館として観覧に供し  
ており、竹の間・宝の間・  
上座の間・畳二丈敷天皇雪  
隠の間・女中部屋・仏間等  
二階は神殿・九畳の間・吹  
抜・姫便所・外三室。

三階は隠間などで建坪百  
十一・五坪(三六八・六平  
方メートル)明治十年再建  
庭内に御文庫・明治天皇御  
膳水井戸・土蔵倉が展示資  
料室で、仁孝天皇第八皇女  
和宮御降嫁の折りの文久元  
年(一八六一)十月脇本陣  
御小休の節、拝領の車付き  
長持ち・明治十三年六月二  
十八日明治天皇御小休関係  
品・二十年八月九日有栖川  
宮様宿泊関係品・木曾代官  
山村氏より拝領の宗紫山掛  
軸・藤村と奥谷につながる  
資料や「初恋」モデルおゆ  
う様関係書・庄屋・問屋・  
妻籠宿脇本陣古文書・医薬  
製造具・道中籠・民具など  
数千点秘蔵されている。

林家を出て仕舞風の旅籠  
や郵便局、民家など宿場の  
面影が残る家並みを散々く  
局の斜めの広大な段々屋敷  
が島崎藤村の母方実家で、  
妻籠本陣で、街道より積石  
二米位の地に正門・脇門、  
黒塀で囲み礎石と記念碑が  
殿々庭園の樹木の紅葉が往  
時の偉厳を偲ばせている。  
十五時五分乗車国道十九  
号は木曾川・国鉄中央線と  
並行し美しい山河を眺め

ながら木曾福島に向う。  
寮寝の床  
木曾レストランに少憩し  
ベランダで眼下百米中央線  
ごしに、木曾八景随一の名  
勝地でおとぎ話で知られる  
浦島太郎が余生を送った所  
としての伝説地を觀賞す。  
木曾川の激流が兩岸の岩盤  
を浸蝕して城壁形二十米位  
の切立奇岩奇勝の地である  
竜宮城より故郷へ帰った  
浦島は親兄弟は勿論唯一人  
知る者もなく、その淋しさ  
に耐えかねて旅に出た、た  
また木曾山中の美しくしい  
里に足を止め、すっかり気  
に入りに住みついたが  
昔の事を忘れかね夢よ今  
一度と止められているを忘  
れ、乙姫様より貰って来た  
玉手箱を開けると、白煙と  
共に白髪の翁と化した。「  
あゝ今迄の事は夢であった  
か」と目ざめる想いであつ  
たと云うことから、この里  
を目ざめと云い床を敷いた  
様な岸を見て、人は寢寛の  
床と呼ぶようになった。  
地質学上では花崗岩の方  
状節理は各所に見られるが  
ポットホール(坑穴)は日  
本でも代表的で、それぞれ  
の岩にはその型になぞらえ  
て名称がつけられ、中央の  
松林と紅葉の中に「浦島堂  
」そはの平な岩が床岩、そ  
の奥に獅子岩・川の向う側  
の穴が大釜、小釜、流れに

そって壁の様な岩が屏風岩  
その他に鳥帽子岩・象岩・  
腰掛岩ありて大正十三年史  
跡名勝天然記念物に指定さ  
れ、長野県々立公園である  
遠望ながら景勝地の紅葉美  
峡谷美に胆能した、休息を  
なし謡曲「寝寛」を思い出  
し再び乗車。  
木曾福島関所跡  
関所は国道より五十米上  
の断崖上の要害の地に設け  
られ、百十数段の石段を登  
る。史跡公園に旧礎石を整  
備復元し記念碑と説明板を  
設え、隣接地に往時の関所  
建物そのまゝに復元さる、  
下番所に関所通行史料資料を  
収める陳列ケースとつく棒  
さすたま・袖がらみ・鉄砲  
弓・手銃・首かせ等の常備  
武器。上番所に模造資料が  
機能的に配置。勝手は参考  
文献の関所文庫。  
この関所の創設年代は明  
らかでないが、中山道が開  
かれたのが慶長七年(一六  
〇二)頃と考えられ、重要  
な守りとして、碓水・箱根  
新居と共に当時の天下四代  
関所と称された。  
当初から木曾代官山村氏  
が代々その守備に任じ、明  
治二年六月までその機能を  
果し、特に女改め・鉄砲改  
めに重点が置かれていた。  
中仙道が東海道と共に江  
戸と京都を結ぶ幹線道路と  
され。女改めの手形の本紙

なから木曾福島に向う。  
寮寝の床  
木曾レストランに少憩し  
ベランダで眼下百米中央線  
ごしに、木曾八景随一の名  
勝地でおとぎ話で知られる  
浦島太郎が余生を送った所  
としての伝説地を觀賞す。  
木曾川の激流が兩岸の岩盤  
を浸蝕して城壁形二十米位  
の切立奇岩奇勝の地である  
竜宮城より故郷へ帰った  
浦島は親兄弟は勿論唯一人  
知る者もなく、その淋しさ  
に耐えかねて旅に出た、た  
また木曾山中の美しくしい  
里に足を止め、すっかり気  
に入りに住みついたが  
昔の事を忘れかね夢よ今  
一度と止められているを忘  
れ、乙姫様より貰って来た  
玉手箱を開けると、白煙と  
共に白髪の翁と化した。「  
あゝ今迄の事は夢であった  
か」と目ざめる想いであつ  
たと云うことから、この里  
を目ざめと云い床を敷いた  
様な岸を見て、人は寢寛の  
床と呼ぶようになった。  
地質学上では花崗岩の方  
状節理は各所に見られるが  
ポットホール(坑穴)は日  
本でも代表的で、それぞれ  
の岩にはその型になぞらえ  
て名称がつけられ、中央の  
松林と紅葉の中に「浦島堂  
」そはの平な岩が床岩、そ  
の奥に獅子岩・川の向う側  
の穴が大釜、小釜、流れに

なから木曾福島に向う。  
寮寝の床  
木曾レストランに少憩し  
ベランダで眼下百米中央線  
ごしに、木曾八景随一の名  
勝地でおとぎ話で知られる  
浦島太郎が余生を送った所  
としての伝説地を觀賞す。  
木曾川の激流が兩岸の岩盤  
を浸蝕して城壁形二十米位  
の切立奇岩奇勝の地である  
竜宮城より故郷へ帰った  
浦島は親兄弟は勿論唯一人  
知る者もなく、その淋しさ  
に耐えかねて旅に出た、た  
また木曾山中の美しくしい  
里に足を止め、すっかり気  
に入りに住みついたが  
昔の事を忘れかね夢よ今  
一度と止められているを忘  
れ、乙姫様より貰って来た  
玉手箱を開けると、白煙と  
共に白髪の翁と化した。「  
あゝ今迄の事は夢であった  
か」と目ざめる想いであつ  
たと云うことから、この里  
を目ざめと云い床を敷いた  
様な岸を見て、人は寢寛の  
床と呼ぶようになった。  
地質学上では花崗岩の方  
状節理は各所に見られるが  
ポットホール(坑穴)は日  
本でも代表的で、それぞれ  
の岩にはその型になぞらえ  
て名称がつけられ、中央の  
松林と紅葉の中に「浦島堂  
」そはの平な岩が床岩、そ  
の奥に獅子岩・川の向う側  
の穴が大釜、小釜、流れに

はこの関所に留め、江戸に向うものについては、此所から碓水関所へ書替手形を發行するとされてきた事などから見て、此の関所が徳川幕府の交通政策上何如に重大視されたかがうかがわれる何れも一朝有事の際は街道を遮断し敵を牽制出来る所として、中仙道のほど中間に位置し福島宿の北端池井坂を登りつめた木曾川の断崖にのぞむこの狭い場所に設けられた。

**高瀬家資料館**

関所跡に隣接して高瀬家がある当家は藤原氏の出で菊地肥後守則澄を祖として菊地家没落後高瀬と姓を改め則澄より四代目高瀬四郎兵衛武浄が大坂冬の陣のころ、此の福島に来て、その子八右衛門武声が代官、山村氏に仕えて以来、御側役・砲術指南役・勘定役などとして幕末まで仕えて永住した。現在の住居庭園・白壁土蔵(資料室)などあるがすべて重要文化財指定の家柄であり、また島崎藤村の深く敬愛したと一人の姉「園」が嫁いた家で、小説「家」のモデル家である。種である、「夜明けの前」のお糸で、ある女の生涯のモデルにもなっている。藤村在宅の折り誌「夏草」を出している。

資料室に藤村の手紙や千

曲川の歌書、木曾九代々官山村良由八十才誕生祝書・小野派一刀流の巻・甲陽別当大将合戦備の図・薬種大看板衝立・九代高瀬頼新助兼事の肖像画・五捨騎一備陣取之図などの見学を終る。

冷々する夕暮れどき勾配急な崖にそって折れ曲りの石段を降りて、国道十九号横断し際の宿泊つたやグラインドホテルに十七時到着、宿窓に広がる木曾山々と木曾川のせまらぎに自然を映すやすらぎの湯、疲れた体を湯船に沈め静かに目をとじれば遠く木曾節が聞える新鮮な山の幸に心をこめ料理に器も地元銘木の纏ったものばかり、つたや名入の陣羽織を着て銘酒に文学と歴史の木曾路第一日を終る。

木曾福島町の宿泊地を午前八時出発し、西に飛騨山脈。東の木曾山脈麓を流る木曾川上流沿いに、国鉄中央線と国道十九号をやがて今日の第一見学地に到着

**万松山興禪寺**  
寺は松老杉と紅葉の山麓深く美しく、宏壯なる堂伽藍は屋根葺替工事中の足場に天高く覆われた姿なるが、京都妙心寺派の靈場木曾三大寺の一つである。

永享六年(一四三四)木

曾家十二代の木曾式部大輔信道公が、祖先義仲の追福を修めんがため、荒廃せる旧寺を改建し、大華和尚の開山と伝える臨濟宗寺院で木曾氏及び木曾代官山村氏累代の菩提所として寺運は盛えた。

寛永十八年(一六四一)明治三十九年、昭和二年と三度の災厄によるも復興し寺域約五千三百㎡のうっそうと茂る老樹の中に荘麗なる諸堂宇が再建完備さる

**勅使門と観音堂**  
勅使門は平安末期様式で元国宝であったが昭和十九年復元した。  
治承四年(一一八〇)源行家が以仁王の勅使として平家追討の令旨をこの門より観音堂に至り義仲に伝えしにより称すると云う。  
観音堂も昭和三十年に再建し安置せる観音本尊は義仲公が深く帰依した、金銅仏で推古時代の作である

**看雲庭と万松庭**  
看雲庭(枯山水)は庫裡から眺める禪院庭園として昭和三十年に巨匠重森三玲氏の作庭で、一木一草を用いず京都の白川砂で雲紋の地模様を作り、流動する雲海的美を構成し、石は瀬戸内海沖島産の緑泥片岩を七・五・三にくみ、広い庭全体の中で、それぞれ動きをもたせ渾然と調和している

一段高く白黒の市松模様

の露台を設け坐禪の場とし更に舞踊・茶会等にも利用するとの事で、庫裡の近代的建築とも調和しモダンな味を出している。

石庭から庫裡の西側のくぐり戸を入ると万松庭がある。江戸中期の作庭で山の斜面を利用した池泉観賞式の庭で、中心に池を設け、築山は松を主体に植込み静かな雰囲気の中に、水落ちの音響が自然美をよりよくさせている。

**木曾義仲公の墓**  
墓は境内の東北端にあつて紅葉の落葉を敷きつめた石畳と石段を登り、上段中央の宝篋印塔が朝日將軍義仲公、右側に当山開基の木曾家十二代信道公の墓・左側十八代義康公・十九代義昌公の墓・左後方の駒型数基は木曾代々の墓

下段左側に巴御前の墓、その左に桶口次郎義光の墓下段右側に小枝御前と一族郎党の供養塔・その右に今井四郎兼平公の墓がある。

義仲は寿永三年(一一八四)正月二十一日粟津にて戦死す、時に三十一才。義仲は源範頼・義経と宇

治の勢多で戦つて利あらず僅か護衛十三騎、その中に年二十八才の妾巴あり、義仲は巴に向つて曰く「義仲死に臨み女を従うは後世の恥なり、汝はこれより木曾に去るべし」と巴悲泣し遺髪を携えてこの地に埋むるなり。

**木曾踊り発祥の地**  
寺の境内に木曾踊発祥記念碑が建てられた。この踊りは永寿年間木曾信道公が祖先義仲の霊を弔わんとウラボンに俱利伽羅谷の戦勝を記念して、本曾城跡より町内若人達が剣戟甲冑を着けタイマツを点じて鉦・大鼓を打ち鳴らして凱歌を揚げて下山し、義仲公の墓前にぬかずき、観音堂前で踊りその霊を慰めた。

この行事は信道公以来明治の初めまで続き暫らく途絶えたが、近年復活し今日全国に知られている木曾踊は、実はこの観音堂前の踊りが時代と共に、町民女子打ち混じ粉粧して夜を徹して踊る様になった。

**木曾福島郷土館**  
興禪寺の横を廻つた城山の坂道を約百米ほど登る、三百余年を経た松林の自然にほど遠い、鉄筋コンクリートの近代的な建物で内に木曾の歴史を物語る貴重な資料が展示され、その内容は中世の木曾文化、江戸時

代の交通・木曾代官山村氏とその文化・町人の生活・八沢の漆器・木曾馬の七部門等資料総数一七〇〇余点特に江戸時代の交通資料は街道・宿場・昔の乗物・本陣と問屋・旅籠と茶屋・昔の旅行を六項目に分類し、交通史の体系にのつとつて細かな解説をつけてある

なお敷地内には、古い民家保存のため開田村の農家を移築したものである。

大きなイロリのある台所を中心にして、両側に小さな二・三畳のヒヤ・デイ・ウスネなどの小部屋の間取り法・石置板屋根、切妻造りの木曾山麓民家の典型的なもので、当時の生活状況を想像し胸を打つ思いがした。室内にベイのたたき台・くり抜板・板たがの桶・粉ぶね・石臼等多種の民具・農具が展示してあり。

周辺に山の神の祠や馬頭観音・道祖神・庚申塔・子安地藏尊など古石仏を配した仏庭園も設けられていた次に木曾郡日義村の徳音寺に向う、国道十九号を木曾川上流流いに針葉樹カラマツの真黄色に染る山々の美しくしさに感嘆しながら、木曾義仲が幼少の頃育つた地で、義仲折願所の南宮神社や旗上八幡宮等の史跡がある日義村に入る。

徳音寺

寺は木曾川の西岸にあり境内の駐車場に着す。山号は日照山・寿永元年(一一八二)木曾義仲が母の小枝御前の菩提を弔って一字を建立、真言宗で柏原寺と号したのが始まりといふ。寿永三年義仲が栗律ヶ原で戦死すると、木曾へ逃れた軍師の大夫坊寛明(西仏上人)が義仲の霊を弔って、小枝御前の墓のかたわらに墓碑をたて、その法名をとって德音寺と改称した。その後水難にあつて諸宇堂を流失し寺運も衰退したが、天正七年(一五七九)大安和尚が再興し、臨済宗に改め、寺観も旧に復して今日に及んでいる。

寺域は約三千平方メートルで本堂と庫裡・宝蔵は元文六年(一七四一)の建立。寺宝は義仲の守本尊兜観音(鎌倉初期作)や義仲愛蔵の東波の竹軸・無準の達磨軸・義仲陣羽織等もあるも住職不在のため参観出来ず残念であった。

享保八年(一七二三)大山城主成瀬準人の母堂が寄進し、大工狩戸正勝が築造した総ケヤキ二層建の山門を見渡し入ると、馬に誇がる巴御前の勇姿像がある。本堂左側の霊屋に義仲公像と木曾家代々の位牌が安置あり。墓域は石柵をめぐらし義仲公墓は小枝御前や家

臣の今井四郎・愛妾巴御前の墓碑と並んでおり、老杉林に囲まれてひっそりと暮むして山寺らしい風情の史跡に深みを感じさせられつゝ退寺。

十時二十分国道十九号を諏訪湖に向け走る。天候曇天となるが帰路故心配なく木曾檜川村平沢の漆器途中木曾名産丸庄漆器店に立寄り、店主の誘導説明により製造工場を見学す。この地区は古くから漆器と木地細工・曲物の特産地として知られ、年産二十五億円余りを上げ、会津・若松、輪島と並んで我国有数の漆器生産地である。

一般に木曾漆器と呼ばれるが、福島町の竜源寺の漆塗りの経宮に「応永元年富田町塗師加藤嘉左衛門献納」とあるところから、約六百年前に既におこなわれていたらしい、近世に入って隆盛期を迎え、文化、文政(一八〇四〜三〇)のころには販路も拡張し、平沢には江戸漆器の間屋数軒あるウルンを掛けるには今日の様な曇天小雨の日が一番乾きよいと聞き驚く、冷たい水洗工程を幾度か繰返して作られる漆器生産に感動しながら、店頭産物を買いて、今一走り、塩尻から国道二十号・岡谷にて昼食し見学予定全部終了。

天候快復晴天となり十二時三十分出発諏訪ICより中央自動車に入り、野沢菜購入のため諏訪湖PAに小休止して、一路帰郷の途につく車窓より諏訪湖・天狗岳・八ヶ岳・置笠山等ガイド説明を聞きながら眺めつゝ、御坂ICより国道一三七号線から一三八線に入り信玄餅を購入のため山中湖畔レストランに小休止、御殿場ICより東名高速道にて

入り大井ICにて降道、国道二五五号線を小田原駅前へ進行。幸運にも天候と紅葉狩期に恵まれ、参加会員協力のもとに見学予定地の完察出来て十七時無事に到着散会した。

参考文献  
中野会長配布資料・現地説明領帳・各所館資料・観光郷土資料誌

# 自叙伝

壽昌寺住職 大井 諦玄  
全理事長 大井 諦玄  
秋窪保育園長

## 第五章 前教職時代つづき

携手俱行壽昌寺 手を携えて俱に行く壽昌の寺  
回頭親見祖先霊 頭を回して親しく見る祖先の霊  
註 喚 笑うさま、「ははあん」とか「ふふん」笑う  
こと又呼ぶ声又は不審嗟歎の意を現す

欲動詞  
甘露門 甘露の法門、仏の教え、仏の境界に至る門  
香語 拈香法語の略、法会読経などの時導師が香を拈じて唱える言葉

施餓鬼会香語 施餓鬼会香語  
風払鐘幡自送涼 風は鐘幡を払い自ら涼を送る  
仏前灯燭放清光 仏前灯燭清光を放つ  
壽昌寺中何功德 壽昌の寺中何の功德  
供養万靈招吉祥 万靈を供養し吉祥を招く

乱蟬吟処閑泉石 乱蟬吟ずる処閑泉の石  
緑樹陰濃夏日長 緑樹陰濃に夏日長し  
註 鐘幡 鐘は、はた、幡はのぼり頭に竜の形や宝珠を飾りつけた竿柱を幢といひ長く下に垂れた布を幡とゆう。今は金属又は木製もある。又説法や法演の時立てるのぼり

昭和九年二月十二日転衣許状を受く、転衣とは色のついた袈裟を掛けてもよろしいと云う許可証である、転衣の許状を受けると両本

焼香の偈  
戒香定香解脫の香  
光明雲台遍法界  
供養十方無量仏  
見聞普薰証寂滅  
普薰を見聞し寂滅を証す

礼拝偈  
能礼所礼性空寂  
自身他身体無二  
願共衆生得解脫  
發無上意歸實際

礼をする者、礼をされる者の性は空であり寂である。  
自の身他の身同体で一つである  
願くは衆と共に解脫を得  
無上の意をおこし真實際に帰せんことを

或る時間に仏の十戒を話したことがある、国語の時間か他の先生の補講か、さだかでない本校の生徒には不適当かも知れないが、若さの至り、こゝに記してみよう。

一、生きとし生けるものは生命を大切にしなければ

二、盗みや不正を犯してはならない

三、夫婦の道を乱してはならない

四、うそ偽りを言つてはならない

五、迷の酒や、思想に溺れてはならない

六、他人の過をいゝ触らしてはならない  
 七、おのれの自慢、人の悪口を云ってはならない  
 八、物でも心でも与えることを惜んではならない  
 九、激しい怒りで自分を失ってはならない  
 九、仏陀の教を疑ってはならない

は調身、第二は洋服の調整  
 第三は呼吸の調制、第四は指の調整、所謂法界定印をする、次は姿勢の調整、口目、耳と肩、鼻と臍の説明  
 調息の方法、初はくすくす笑う、仲々うまくゆかない  
 回を重ねるにつれ上手になった、私が体操の受持ち、坐禅も受持ち動と静、相反する如く思うが、左に非ず全く一致する、昔から劍禅不二と云う不思議底を思慮する。

第六章 応召時代

大正十二年私三十六才愚妻二五才長男大俊五才次男諱三三。才九月一日動員下令即ち赤紙到着、さあ大変親戚に通達する、学校や知人に通知、幟が来る十何本それは木綿大巾で二丈、青あり赤あり、山門の片側に一列に立てた、皆

征して居る故甲府に軍旗はないだから留守隊と云うに  
 応召、同月同日歩兵第九四十九聯隊第三機関銃隊に編入同月十一日編成完了し  
 一個中隊が編成されるには  
 どんな具合だか話してみよう  
 兵の氏名生年月日留守担当  
 当者氏名住所を私は保管しているが今は略す

祝大井諱玄君出征〇〇〇  
 より書かれてある、五日に祝宴、六日出発、七日充員召集のため歩兵第四十九聯隊留守隊(本隊は既に)

戦地への私の住所は上海派遣軍伊藤部隊津田部隊岩下部隊松田隊大井諱玄

|       |    |       |       |
|-------|----|-------|-------|
| 応召年月日 | 官等 | 氏名    | 備考    |
| 八月廿五日 | 大尉 | 松田 真平 | 中隊長   |
| 〃     | 見士 | 吉川 順哉 | 小隊長   |
| 〃     | 准尉 | 板山 義長 | 彈薬小隊長 |
| 〃     | 軍曹 | 米山 惟時 | 事務担当  |
| 〃     | 上等 | 石橋 龜雄 | 〃     |
| 〃     | 少尉 | 水元 三郎 | 小隊長   |
| 九月一日  | 兵  | 三名    |       |

|      |   |      |
|------|---|------|
| 九月二日 | 兵 | 四名   |
| 九月五日 | 〃 | 十名   |
| 九月六日 | 〃 | 十三名  |
| 九月七日 | 〃 | 十三名  |
| 九月八日 | 〃 | 十三名  |
| 九月九日 | 〃 | 十一名  |
| 九月十日 | 〃 | 十一名  |
| 計    |   | 八十三名 |

上海派遣軍ともなると大層な人員となり戦争は経済的、精神的に如何なるものか想像出来ると思う。  
 八月廿五日から九月十日迄十七日間に亘って編成されて愈々完結

一個聯隊を仮に十二個中隊とし外に聯隊本部大隊本部、中隊本部、大行李小行李等数へ来れば想像出来ると思う、それが全部新品の兵器、被服、器具等、それが敗戦ともなれば目茶苦茶驚かざるを得ない。

私等第三機関銃隊は湯村温泉の館名は忘却したが旅館で編成され毎日入浴出来るし上げ膳、据膳短い期間だが大名生活、散兵中隊の羨望的

日々の激戦で戦死、戦病負傷で入院、帰還する、之を補充する、以下私の記憶にあるだけ記してみよう

|       |        |      |
|-------|--------|------|
| 第一回補充 | 十月廿三日  | 兵六名  |
| 第二回   | 十一月三十日 | 兵十五名 |
| 第三回   | 十二月三日  |      |

|     |            |      |
|-----|------------|------|
| 第四回 | 大正十三年七月十日  | 兵十九名 |
| 第五回 | 九月七日       | 兵九名  |
| 第六回 | 九月二十日      | 兵七名  |
| 第七回 | 十一月八日      | 兵二十名 |
| 第八回 | 十二月十日      | 兵廿二名 |
| 第九回 | 昭和十三年七月廿六日 | 兵四名  |
| 第十回 | 九月二日       | 兵十九名 |
| 計   |            | 二〇八名 |

原・小林将校二名兵十名  
 第四回 大正十三年七月十日 兵十九名  
 第五回 九月七日 兵九名  
 第六回 九月二十日 兵七名  
 第七回 十一月八日 兵二十名  
 第八回 十二月十日 兵廿二名  
 第九回 昭和十三年七月廿六日 兵四名  
 第十回 九月二日 兵十九名

いかに激戦だったか理解出来る  
 昭和十二年九月十一日編成完結、松田隊長訓示要旨左の通り

一、戦友と争う事勿れ、二、賭博嚴禁  
 三、女色を慎しむこと  
 軍装した背薬約三十キロ位湯村から甲府駅迄小休止三回、見送り来た母親が持って涙を流した、重いのに驚いて、上手に背に上げないと新品の皮が切れる程

九月廿二日呉淞橋上陸戦闘開始、軍人は昼夜の別なし、呉淞クリークに到着すると名古屋師団の兵隊が全部が全部仏面で顔色青然君たちも俺みたいに、そのうち仏面こなるよと云うた今でも耳に残って居る。

九月廿五日より十月四日迄呉淞クリーク左岸地区戦闘、十月五日より十月十一日迄呉淞浜渡河戦、このあたり沖々の激戦、戦死戦傷者毎日続出、殊に毎日雨

重い、涙を流したのも無理もなしだ、私等は何処へ行くやら極秘、兎にも角にも車中の人となった、国府津の駅で二十分位停車、梨大箱一個差入があった、嬉しかった、戦友と上陸する迄楽しんだ神戸に到着、布団に寝るは之が最後だと思ふと何んとなく懐しくて、有り難く誠に心切な宿舎であった、戦地から二、三回手紙を出したが今日この頃は忘却、申訳けない、感謝の至り。

九月十八日神戸出港、関門海峡に差しかゝる時松田隊長の命令で全員甲板に集合、隊長の訓示に「これが日本国の見納だ皇居に向って最敬礼」万歳三唱  
 大日本帝国万歳、天皇陛下万歳  
 目頭が熱くなった

九月廿二日呉淞橋上陸戦闘開始、軍人は昼夜の別なし、呉淞クリークに到着すると名古屋師団の兵隊が全部が全部仏面で顔色青然君たちも俺みたいに、そのうち仏面こなるよと云うた今でも耳に残って居る。

九月廿五日より十月四日迄呉淞クリーク左岸地区戦闘、十月五日より十月十一日迄呉淞浜渡河戦、このあたり沖々の激戦、戦死戦傷者毎日続出、殊に毎日雨

天、濛の中は泥土膝を致する、足裏のしわから血が出る、いたい歩けない、濛の中では大小便は出来ない、外へ出て用をたす、中には小便最中に敵の小銃弾が物を、もぎとってしまった兵隊もあつた、又大便中、頭に弾が当たって、ウンとうなって、名譽の戦死、文字通りウンが悪い兵隊の中には頭の右側の鉄カブトの中へ小銃弾が入り後を通り、左側にぬけて、傷もなく助かった幸運の兵隊もあつた

當時は慰問袋はなし、紙のないのには閉口、用をたして後始末に困つた、草はなし、あたりは泥土、泥土十月十二日より十月廿七迄呉淞浜右岸地区戦闘に参加、翌廿八日大場鎮攻略して、ドラム鑼で風呂を造り入浴した心地、免に角一ヶ月余も体を洗はず、入浴など思いもよらない、口をそぐぐ水もない、軍服は一装用だけれど泥を木片でぬぐか、掃除をする始末、顔は垢でなくて泥土、そこでドラム缶で入浴、天に昇つた心地ここでドラム缶での入浴を紹介しよう。

先づ風の方向を見て地を掘り土に鉄の棒二本か三本渡し上に缶を据え水は三分の一入れば十分、僅の時間でわく、鏝に相当の踏板が必要、之を踏んで中に入る

先づ風の方向を見て地を掘り土に鉄の棒二本か三本渡し上に缶を据え水は三分の一入れば十分、僅の時間でわく、鏝に相当の踏板が必要、之を踏んで中に入る

戸板か何かあって、洗場を造えれば万点、泥や垢は一度では取れない、習日も入浴出来た。

十月廿八日より十一月十三日迄浦東作戦、休む暇なし。

十一月十四日より十二月七日迄上海附近の警備、此の間廿日余の間、砲弾の音もなく、食事はよくないが腹一杯食べられる、入浴も隔日に来れる、戦地の醍醐味十二分にあじわった。

十二月八日より一月四日迄杭州攻略戦。

上海から杭州迄何程の距離があったか毎日五十キロ六十キロ、歩いた、歩いた平地ばかりで山がない、故に川は泥水、黄河とはこの意味かつくづく感じた、山紫水明とはよく云ったも

弔忠魂 弔忠魂 殺人刀は活人剣 一死従容報四恩 万里長空君不見 香雲遍界弔忠魂 征中転却人間外 占領杭州花一村

一月五日より二月十七日迄杭州湾北岸及び第二次浦東の掃蕩並に上海附近の警備。

二月十八日より四月廿日迄崇明嶋及び東台作戦並に上海附近の警備

昭和十三年一月七日伍長任命

のぞ、山が無ければ水明でない、毎日の行軍幾日行軍したかさだかでないが或る日遠方に山が見えた、山が近くなるにつれ水が澄んで来た、程よい所で二時間大休止、早速裸になって川の中へ飛び込んだ、身と下の帯の洗濯、けれど石鹼がない、誰もいない、仕方がない、石鹼の有難味がわかった、然し心も身も清らかに

幾日行軍したか愈々杭州に到着、光風の美しさには驚いた、全く箱庭の様で一幅の画の様、水も美しい、天の橋立と松島とを混入した美観、ここで第二回目の正月を迎えた理、然し餅も無ければ松もない、残敵掃討もない只勤務だけ、杭州は相当寒い、

八月十一日より十月十六日迄星子西孤山附近の攻略戦。

九月二十日陸軍歩兵軍曹に任命さる。

九月十七日より十月十八日迄隘口街及び青石橋附近の攻略戦。

十月十九日より十一月二日迄徳安攻略戦及び修水河に向う追撃戦。

十一月三日より十四年一月廿一日迄修水河以北の守備。

二月一日より四月五日迄修水河渡河戦及び南昌攻略戦。

修水河渡河戦に友軍の砲列何百約一時間位だが空中で砲弾が相逢う事が無かつたが不思議な位、野砲、重砲、迫撃砲、その数を知らず、砲声止むと工兵が働きて鉄舟を並べ上に鉄板を渡せば歩兵が彼の岸に行けるがそれまでが大変。然し呉松浜渡河戦で苦杯をなめた軍部は、模範的作戦とか上方部の言。

南昌攻略戦夜行軍が又大変、夜十二時頃或る地点に到着、命令受領に曹長が行く、帰って来る明朝四時出発、四時間中に、夕食、明日の朝食、昼食の炊きさん、馬の手入れ、飼付け、現品受領、それが毎日、中には行軍中居眠をして転ぶ兵もあつた。

四月六日より九月三日迄南昌及びその附近の掃蕩戦又は守備。

九月四日交代掃蕩を命ぜらる。九月十四日南昌出發。十月十日大阪港上陸。昭和十四年十月十二日留守隊歩兵第四十九聯隊到着。十月十四日召集解除。不能と云うは愚人の辞書にあるとかナポレオンが云うそうだが、軍隊生活では不能はない、現役生活、応召つくづく此の身で味った。

自修学校長大井龍跳師には一方ならぬ御世話になり御蔭を以て負傷することが出来ました。特に昭和十三年一月八日日本師大井大雲遷化不肖出征中故一本の香も奉ずるを得ず、世寿八十二歳。昭和十三年二月廿八日付にて、寿昌寺住職の拝命を得、あれやこれや龍跳師に一方ならぬ御法受を得ました、然し己に無き人、感激に堪へずと云う処。

自修学校の職員から慰問書翰を戴いた宛名は左記の通り切手代貳銭。



上海派遣軍伊藤部隊津田部隊松田隊 大井諦玄殿 自修学校職員一同 第一信 昭和十三年二月三日 稍煙は饜れて故郷の梅便り 田代宗匠 豆撒きの日 栄 萩村 戦勝の鬼は外高か高かと 松 本 戦捷の春を寿ぐ梅の花 大 井 主征きて寂しき家も福はうち 右座興の俳諧何卒御笑覧ひ下度い併せて益々御奮 闕の程御願申上候 第二信 昭和十三年三月三日 雛祭り男の子達口惜しがり 栄 萩村 どの山も南京城の三日なり 田 代 戦線のババの写真も雛段へ 柴をかこみ伍長殿に花が咲き 柴 野 雛の宴七十の翁酔はれけり 松 本 座興の句御贈り申上候何卒御笑味ひ下度願上候、 又後便にて 草々

第三信 昭和十三年四月廿九日 戦捷五鹿なく里へ帰りけり 柴 野 新聞の夫の写真切りぬかれ 松 本 君は戦線僕は銃後共に尽さん国の為 田 代 清水出て高田は蛙はね廻り 西 山 消解石を二本の腕で転がせ転がせ 栄 萩村 み灯や武運を祈る今朝の春 大 井 天長の佳節寿ぐ牡丹かな 第四信 昭和十三年六月廿七日 国府津日の出屋に津田部隊慰問便の責せる戦利品を見て

飾窓に並べる敵の品々に 武勲のほどそぞる偲ばる 田 代 今日も亦軍事郵便とりまかれ 西 山 六月十八日寄方面家庭訪問にて 掃杉見えて勇氣も百倍し 大井先生の家を訪問して 柴 野 戦場の苦勞も髭に偲ばれて 同じく 松 本 戦捷の供養会誦は御手のもの 大 井 昭和十五年私三十九歳、四月廿九日明治勲章の勲七等に叙せられ青良桐葉章を贈らう。

柴 野 萩村 田 代 松 本 大 井 柴 野 松 本 田 代 柴 野 松 本 大 井